

幼稚園教育の科學的研究の前途

——ズビッドソンに據る——

紹介

モンテッソリーはその態度、方向、方法等に於て大いに科學的である、けれども吾々が若し女史の選擇の原理を驗したならば其處に多少の不滿を覺えないわけには行かないのである。吾々は女史がこの點に於て獨斷論に陥つて居ることを明かに認めるのである。

試みに感覺練習の理論と實際とを取つてこの點を考へて見る。嵌込みの形や色の表や布地や其他モンテッソリーが感覺練習に用ゐるいろいろのもは多くの幼児の根本的興味を捉へ、これを維持せしめる効果を十分に有するのである、しかし是等のものが女史が豫想して居るだけの教育的効果を幼児の上に贏して居るか何うかは一寸疑問であ

る。吾々は無論のことモンテッソリーとても斯る事柄がその効果を結論的に證明された例がないので、果して十分に信頼し得べきものであるか何うかを知らないのである。モンテッソリーはそれでもその感覺練習によつて一般陶冶の上に著しい効果を擧げ得たと言ふであらう。成程色の表を以て練習したならば幼児は一般に色といふものに對して感じ易くなるかも知れない、しかしならないかも知れない、これは未だ決定されては居ないのである。種々の嵌込みの形によつて幾何學的形體を練習したならば幼児をして一般の形といふものに對して注意を拂はしむるに至るかも知れない、しかし至らないかも知れない。吾々は孰方とも言へ

ないのである。感覺的差異を辨別させる爲めに幼兒をして日をつぶらしむることは幼兒の實際生活に多大の貢獻を與へるかも知れない、しかしこれに就て誰も確證することは出来ないのである。モンテッソリーの練習は孰れ一つとして、その効果を實際に確められたものはないのである。モンテッソリーは假説と確説とを混同し、可能性若しくは蓋然性と確實性と取違へて居る傾きがある。モンテッソリーは尙多くの重要なべき研究、實驗、調査等を飛び超えて來て了つたのである、この點に於てモンテッソリーは充分の批評を受くべき必要があるのである。

けれどもモンテッソリーはその説の實行に於ては充分の權威を持つものである。女史は心理學の特殊の體系を學んだ、女史はその結果すべての高級な智的態度や過程が感覺に依存すると信じたのである。女史は又感覺の經驗は數種の感覺機關の感覺に於て性質の相違又は強さの相違の度を辨別

することから成立つと信じたのである。それ故教育課程の第一階段として先づ感覺の練習を行ふ必要があると考へたのである。以上の推理は全く論理的である、乍併悲しいことには其の前提が確實でない、何故ならば理解、觀察、反省、判斷等の高級なる過程に必要な感覺練習の基礎といふものは感覺的相違の辨別にのみ依存せず、他の多くの過程とも連結する必要があるのである。

モンテッソリーは醫者の診斷はその感覺的辨別の密かさの度に比例して安全であると言ふ。吾々が年を取つてゐながら兎角間違ひの多いのは感覺的辨別力の缺乏に因ることが多いからである。モンテッソリーは次のやうに書いて居る。

「美學及び倫理的教育はこの感覺教育に緊密な關係を持つて居る、感覺を倍加せよ、刺戟に於ける些かの相違をも感じ得るやうに吾々の感覺を鋭敏ならしめよ、然る時は吾々は感受性を緻密ならしめ、快樂を倍加することが出来るであら

う

これは甚だ結構なことであるが、しかし斯かることは嚴密に眞理であり得るであらうか、醫者の診斷といふものは決して感覺的の辨別にのみ依つて居るのでないことは言ふまでもないことである。感覺の微細なる辨別をさへなし得るに至つたならば、それだけで、我々は思ひ違ひ、考違ひを避けることが出来るであらうか、美學及び倫理的鑑賞と感受性との關係は女史の言ふ如く爾く簡單であらうか、甚だ疑はしいのである。現代の心理學は爾く撲素な感覺論には極めて些少の支持を與へるに過ぎないのである。

近 刊 紹 介

○高橋穰氏著『心理學』

どの學問でも一通り精しく學ばなければ理解も興味も起らないものであるが、心理學に於て殊に

そうである。所謂我國の教科書風に簡略な書き方をした心理學位讀んで益のなく味のないものはない。しかし又、餘り精し過ぎ専門的過ぎる本は、初學の人には適當しない。心理學を讀まうといふ人が近來非常に多に拘はらず、薦めるに適當な書物の少ないとは常に遺憾とする處であつた。殊に吾人が初學の人に先づすゝめ度い心理學は、初めから應用的方面を主にしたものよりも、心理學の一般概念を包括的に全般的に説かれたものを必要とする。つまり、心といふ廣い問題の解釋に近づいて行く一つの重要な入口として、心理學の組織的論述を知る必要があるのである。こうなると一層適當の書が少なかつた。應用を主とすれば比較的通俗に分り易く書けるが、心理學の組織を主にしては、どうしても六かしくなり易いからである。然るに高橋文學士の『心理學』は吾人の此の要求に向つて、頗る適切な満足を提供して呉れた。此の書は哲學叢書の第十二篇として著はされたも